中等教育コース（美術教育専攻），工芸１

コロナ過での実技授業について

美術教育講座・原田　義明

１．授業の概要及び目的

工芸１は,中等教育コース(美術教育専攻)の２年次前期に開講されている選択必修科目である。今年度は最終的に中等教育コース(美術教育専攻）２回生３名，３回生１名及び小学校サブコース１名，小学校サブコース４回生３名，造形芸術コース４回生１名，計９名が受講した。

本授業は，やきものにおける手びねり成形とロクロ成形の基本的な技法の習得を目的とする。器の制作を通して用と美，機能と造形を理解し，先史時代の昔から人間の生活に密接に結びついているやきものについて理解を深めることにある。

なお,授業の到達目標は以下の通りである。

〈到達目標〉

（１）やきものを構成する二大要素である土と釉薬について基礎的な事柄について理解し手びねり成形の技法について説明できる。

（２）与えられた課題の内容を理解し，作品制作に生かすことができる。

（３）土と釉薬及び手びねり成形及びロクロ成形の特性を的確に捉え，各自の制作意図に従って，作品化できる。

2．授業内容

実技が中心の授業である。授業では，前半に「手びねり成形法」,後半に「ロクロ成形法」の各技法を用いて作品制作を行う。土づくりから始め,課題を設定し,デザインスケッチ,土練り，成形，乾燥，素焼き，施釉，本焼きの一連の作業をその状況に応じて説明し，制作を進めて行く。

3．コロナ過での実技授業

年度当初より，新型コロナウイルス感染拡大防止の為、実技授業を含むすべての授業が遠隔での実施となった。これにより，授業者も急遽，遠隔に対応した授業内容を再検討することとなった。

以下，遠隔での実技授業の内容について述べる。

１）授業内容の見直し:「ロクロ成形」は大学の設備等の使用が必須のため，比較して使用する道具等が少なく自宅での学習が可能だと考えられる「手びねり成形」に課題な内容を統一。

２）修学支援システムの活用：資料の配布や連絡等に修学支援システムを活用。

３）材料・道具について：制作に使用する材料（陶土）と道具（作業板、粘土ベラ等）について，日時を決めて受講生に配布。また，粘土成形の終わった課題作品については，日時を指定して提出。

４）毎週，授業実施曜日・時限帯に，受講生に課題作品の進捗状況をメールに写真添付で報告を義務付けた。その際，制作に係る質問等を受け付け，可能な限り，その日の内に課題作品へのコメント，質問への回答の返信を行った。また，授業の出欠については，４）の報告をもって替えた。なお，第２クォーターからは申請により，一部対面授業が可能になったので，　施釉や合評会については感染予防対策を徹底して小人数により実施した。

4．授業改善のためのアンケート

授業最終日の合評会後に受講生を対象とした授業アンケート調査を実施した。アンケートでは，問４までは５段階評価で行い，①全くそう思わない（良くない）②あまりそう思わない（あまり良くない）③どちらとも言えない（普通）④ややそう思う（良い）⑤強くそう思う（非常に良い）とした。

なお，問 5～7 の回答については記述式とし，実技授業を遠隔で行うことについて，そのメリットとデメリット等を問う設問とした。

回答者８名

5．アンケート結果

【授業の内容に関する質問】

1. 授業テーマ・目標は授業展開の中で明確でしたか。

④4 名　⑤4 名
2．授業の内容・レベルはあなたにとって適切でしたか。
④2 名　⑤6 名
3．この授業で，あなたのこの分野への興味・関心は向上しましたか。
④1 名　⑤7 名
【受講生自身に関する質問】
4．あなたはこの授業に主体的・意欲的に取り組みましたか。
④3 名　⑤5 名
【授業方法に関する質問】
5.今学期，あなたは本授業（実技）を基本的に遠隔で受講しました。対面とは違うメリットがあれば述べてください。
○自分の好きな時間に取組むことが出来る。時間がたくさんある。
○時間が長く取れるのはもちろんだが，自分がやりたい時にできたのは良かった。
周りの目を気にする必要がなかったのは良かった。
○工芸 1 を去年受講した時は，授業の時間だけでは足りなくて，大学に居残ることが多かったのですが，今回はたっぷり時間をかけて制作することが出来た。
○周りの目を気にすることなく自由に取り組める。自分のペースで作業ができる。
○時間のある時に制作できたので，やる気のある時にできた。
○好きな時間にできる。粘土の状態に気を配ることが出来る。
○制作時間が多く取れ，行う時間も自由にできる点。自分で考えて行ったり，調べたりできる点。
○好きな時間に好きなだけ取組むことが出来る。肩の力を抜いて作ることが出来た。
6．デメリットがあれば述べてください。
○実技全般の授業に言えることだが，やはり適切な指示を受けづらくなる点。
○保管等が難しい点（場所の確保，乾燥度合い，作品を持ってくる時）。失敗していても気付けない点。
○場所がない。保管が難しい。
○先生に直接見てもらえないので，本当にあっているか心配だった。
○困ったときに助けが求められない。周りの進度が分からないから自分は遅れているのでは？と心配になることがある。
○家での作品管理と大学へ運んでくるのが大変でした。
○ろくろが回せなかった。細かい指導がもらえなかった。部屋が汚れる。
○アドバイスをすぐに聞いたり，直接的な指導を受けたかったりしてもできない。先生の手本や他の学生の様子を見ることが出来ない。
【授業全体に関する質問】
7．今学期は新型コロナウイルス
防疫のため，遠隔授業となりました。今後感染状況によっては，後学期も遠隔授業の可能性があります。その場合，授業者にぜひ改善してほしいことや要望がありましたら述べてください。
○この時間は陶芸室を使っていいよ，と時間を分けてそれぞれに開放できれば嬉しかった。
○特になかったです。メールでの受け答えがとても丁寧で分かりやすかったです。
○動画などが YouTube などにあると言った場合には，URL なども明記してほしいです。
○特にありません。

6．まとめ

今回の受講生は，重複履修等で既に陶芸を経験している学生 3 名を除き，その他の受講生は陶芸未経験者であった。これまで受講生と同じ時間と空間を共有しての授業が当たり前であった中，遠隔で実技の授業を実施するには多くのハードルがあった。一方で受講生のアンケートから，メリットとして，遠隔（非同期型）は自分の裁量で自由に制作に取組めること。また，他者の目を気にしないで制作に取組めること，を多くの受講生が挙げた。これについては，授業者として初めて気づいた点であった。デメリットについては，教員に直接指導を受けられないことによる不安や，自宅の部屋で作業することでの作品保管の難しさ。また，メリットに挙げながら，他者の作品と比較できないことへの心配や不安も挙げられていた。年度末の現在，実技授業の多くは申請を行い許可がでれば，対面での実技授業が可能になっている。今回，遠隔で実技授業を行ったことにより，新たな視点で授業を見直す機会となったと考える。しかし，改めて実技の授業は対面が基本であることを再確認したことも確かである。